

邪馬台国の時代③ ～卑弥呼の外交②～

河村哲夫

正始二年(241)——芍陂(しゃくひ)の役

すでに述べたとおり、正始元年(240)当時の魏王朝においては、曹爽と司馬懿が内政と軍事を分け合う形で、微妙な均衡状態が保たれていた。

このようなときに、景初三年(239)12月、邪馬台国の卑弥呼が使者を派遣して、魏王朝から厚遇を受けたことについては、前号において詳しく述べたとおりである。

しかしながら、わずか8歳の曹芳が魏の皇帝に即位したことを知った呉は、チャンスとみて魏への攻勢をうかがい、正始二年(241)夏4月、揚州と荊州の二方面から軍事侵攻を開始した。

① 揚州方面

淮南(安徽省淮南市)へは呉の大將の全琮(ぜんそう)が、六安(安徽省六安市)へ諸葛恪(しよかつかく)が軍を進めた。

② 荊州方面

樊城(はんじょう・湖北省襄陽市)へは朱然(しゅじょう)が、柵中(そちゅう・湖北省南漳県蛮河流域)へ諸葛瑾(しよかつきん)・歩騭(ほしつ)が軍を進めた。

やがて、夏5月、全琮軍が芍陂(しゃくひ・安徽省寿县南)に侵入し、朱然らの軍5万の兵が樊城を包囲した。

漢江をはさんで、北に樊城、南に襄陽(じょうよう)城がある。

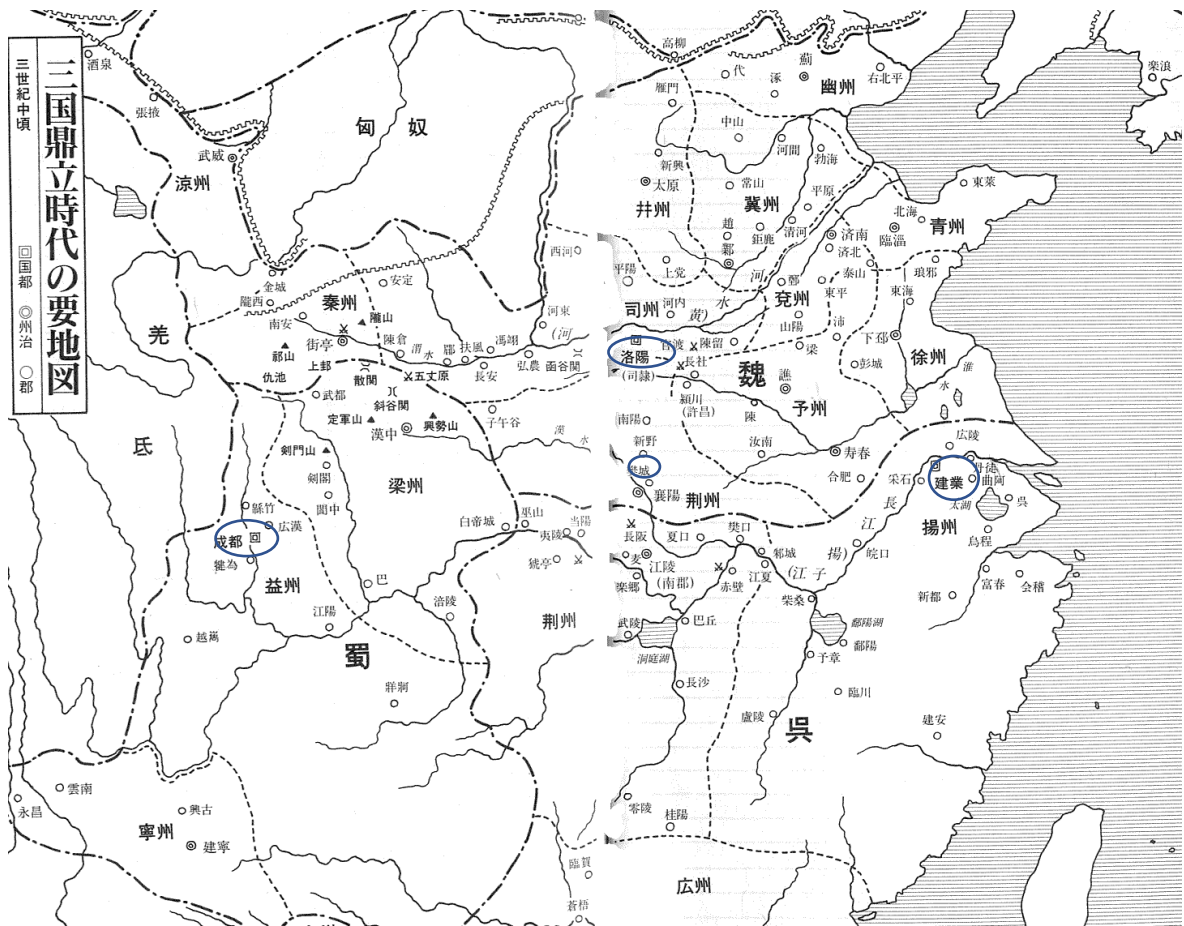
古来、この地は用兵上の必争の地とされ、呉軍がこの地を抑えれば、洛陽への強大な前進基地となる。

危機感を強めた司馬懿は、朝廷内の反対派を押し切り、軍を率いて洛陽を出発した。

気温が高く、消耗をふせぐため短期決戦に持ち込まねばならない。司馬懿は、軽装の騎兵をさしむけて挑発したが、城に立てこもった呉軍は挑発に乗らない。

そこで、全軍総攻撃の構えで威嚇したところ、呉軍は夜中に城を捨てて逃走した。それを待つて司馬懿らは、「思う存分殺戮、捕獲した」(『三国志』)。

こうして、司馬懿によって、呉軍の北進は阻止され、再びつかの間の雲の晴れ間が訪れた。



正始四年(243)——卑弥呼が二回目の使者を派遣

正始三年(242)、遼東方面でふたたび高句麗が不穏な動きをはじめた。

それに対し、幽州刺史の毌丘儉は、玄菟郡太守王頎、楽浪郡太守劉茂、帯方郡太守弓遵などと連携して警戒を強めた。

そして、正始四年(243)の12月になって、「倭国の卑弥呼が使者を派遣して捧げ物を献上した」(『魏志』)のである。

『魏志倭人伝』にも、

「その四年、倭王、また使いの大夫伊声耆、掖邪狗ら八人を遣わし、生口、倭錦、絳青縑、帛布、丹木拊短き弓と矢を上献す。掖邪狗ら、ひとしく率善中郎将の印綬を拝す」

とある。

その目的は定かではないが、年頭に皇帝が臣下及び各国の使節から受ける新年拝賀の儀式—「元会儀礼(げんかいぎれい)」に参列するためであったかもしれない。

卑弥呼の第一回目と二回目の使者の比較

	第1回 景初三年(239)12月	第2回 正始四年(243)12月	備考
使者	大夫・難升米 副使・都市牛利 計2人	大夫・伊声耆 副使・掖邪狗 随員・6人 計8人	(第一回) 難升米・率善中郎将銀印青綬 都市牛利・率善校尉銀印青綬 (第二回) 8人とも率善中郎将の印綬
貢物	男生口四人 女生口六人	生口	
	斑布二匹二丈	倭錦	倭国産の錦織物
		絳青縑(こうせいけん)	赤糸と青糸の織物
		帛布	絹布
		丹木拊短弓・矢	朱塗の短弓と矢(諸説あり)

第一回目と第二回目の違いについていくつか指摘したい。

まず、使節団の人員構成が異なる。

一回目は、大夫・難升米と副使・都市牛利の二人だけが記されている。

難升米の読み方について、「なしめ」「なしま」「なんしょうべい」などと読まれるが、「難」は『難の県(あがた)』の「難(な・nar)」(『日本書紀』)、「奴国」(『後漢書』『魏志倭人伝』)の「奴(な・nag)」とほぼ同音とみていいであろう。いずれにしても、上古音では「な」と発音する【なお、周～漢代の上古音については、『漢和大辞典』(藤堂明保編・学習研究社)を参照している】。

「升」は「し(thien)」、「米」は「め(mer)」であるから、「なしめ」でよろしかろう。

大胆に推測すれば、奴国の王族出身でありながら、邪馬台国の中枢で活躍していた人物であったかもしれない。

このときから2年後の正始六年(245)、魏の皇帝は帯方郡を通じて難升米に黄幢(こうどう・軍旗)を授与し、正始八年(247)に邪馬台国と狗奴国の和平を仲介するため帯方郡の塞の曹掾史張政が倭国に渡った際、難升米に黄幢と詔書を手渡していることからみて、魏は難升米を邪馬台国の代表者のごとく遇している。難升米とはいったい何者なのか。

なお、『日本書紀』に引用された『魏志』には「難斗米(なとめ)」と記されている。この稿では、とりあえず「なしめ」として進めたい。

次に、副使の都市牛利のことである。「つしごり」と読まれることが多いが、上古音では「た(tag)し(dhiəg)・ご(ŋ iog)り(lied)」のような読み方になろうか。

『魏志倭人伝』の二度目以降の記述では「牛利」と略されるから、「ごり」が名のようである。日本人の苗字は伝統的に地名に由来するものが多いが、「つし」は筆者の住む北部九州では吉野ヶ里遺跡近くの「鳥栖(とす)」あるいは「対馬(つし・ま)」くらいしか思いつかない。「たし」はまったく思いつかない。いずれにせよ思いつきの世界なので、不明としかいいようがない。

第二回目の使者は「大夫伊声耆、掖邪狗ら八人」である。伊声耆と掖邪狗を一人の名とみる説もあるが、現代の日本人ではあるまいし、難斗米や都市牛利と比べても長すぎる。二人とみてよろしかろう。

そして、団長は普通一人であるから大夫は伊声耆で、掖邪狗は副使、その他の六名は一般団員とみるのが常識的であろう。

ただし、第一回目と異なり、8人全員が等しく「率善中郎将」と「印綬」を授けられている。

印綬としか書いていないが、一回目の例からみて「青綬」すなわち銀印であったろう。

伊声耆については、「いしぎ」あるいは「いせいぎ」などと読まれるが、上古音では「い(ier)・てい(thieŋ)・ぎ(gier)」とも読める。「いてい」が苗字で、「伊都」を連想するが、これまた思いつきの説でしかない。

そもそも、復元された上古音の発音の精度についての根本的な問題がある。

掖邪狗についても、「ややこ」「えきやく」「やざく」などと読まれるが、上記の漢和辞典の上古音では「diak·ŋiäg·kug」となり、「ややこ」というよりも、「で(じ)いやく」のような感じにもおもえ、ますます連想が湧いてこないが、強いて言えば、『魏志倭人伝』の「其の余の傍国」のなかの「伊邪国」と似ていないでもない。しかしながら、これまた思いつきの説以外の何ものでもない。この稿においては、一応これくらいにして、『魏志倭人伝』のなかの倭人語については、あらためて述べることにしたい。

いずれにせよ、卑弥呼が2回にわたって使者を派遣したことにより、卑弥呼の「親魏倭王」の金印のほかに2+8=10個(率善中郎将印9個、率善校尉印1個)の銀印が日本側に授与された。

邪馬台国に関しては、1個の金印のみならず、10個の銀印についてもしっかりと心にとどめておく必要がある。

なお、邪馬台国から持参した貢物について、一回目よりも二回目の方が増加しているが、飛び抜

けて目を見張るほどのものではない。「生口＋貢物」という構成はおなじである。

それに対して、中国側からの返礼の品々について今回は何も記されていない。しかしながら、記されていないだけで、第一回目の例に準じた品々を下賜されたことはまちがいなからう。

なお、一回目と二回目の日程上の比較については、次のとおりである。

第一回目	景初二年(238)	<ul style="list-style-type: none"> ・9月司馬懿が遼東の公孫氏を討伐 ・10～11月ごろ劉昕を帯方郡太守として派遣
	景初三年(239)	<ul style="list-style-type: none"> ・1月1日魏の曹叡(明帝)崩御・曹芳即位 ・1～6月ごろ帯方郡太守が劉昕から劉夏に交替 ・2～4月ごろ帯方郡と卑弥呼の使節団派遣について調整 ・5月卑弥呼の使節団が出発 ・6月卑弥呼の使節団が帯方郡に到着 ・12月卑弥呼の使節団が洛陽に到着・新皇帝曹芳に拝謁
	正始元年(240)	<ul style="list-style-type: none"> ・1月ごろ卑弥呼の使節団が洛陽出発 ・2～4月ごろ帯方郡太守が劉夏から弓遵に交替 ・6月ごろ卑弥呼の使節団が帯方郡に帰着 ・7月ごろ帯方郡の使者とともに九州に到着
第二回目	正始四年(243)	<ul style="list-style-type: none"> ・2～4月ごろ帯方郡と卑弥呼の使節団派遣について調整 ・5月ごろ卑弥呼の使節団が九州を出発 ・6月ごろ帯方郡を出発 ・12月洛陽に到着
	正始五年(244)	<ul style="list-style-type: none"> ・6月ごろ卑弥呼の使節団が帯方郡に帰着 ・7月ごろ九州に到着

※ _____ を付した部分は『魏志』に基づく。「ごろ」は推測。

刺史の毌丘儉

すでに述べたとおり、遼東方面の公孫氏を討伐するため司馬懿が遠征したとき、副将として補佐したのは、幽州刺史の毌丘儉であった。

景初二年(238)9月司馬懿とともに遼東を平定した毌丘儉は、その後も幽州を拠点に朝鮮方面の動向に目を光らせていた。



狙いを定めたのは高句麗である。すでに述べたとおり、この当時の高句麗王は位宮である(朝鮮の『三国史記』では位居・東川王・在位 227～248)。

彼は公孫淵討伐には協力的であったものの、正始三年(242)になるとふたたび魏から離反する動きをあからさまにした。

『魏志』毋丘儉伝には、

「正始年間、高句麗がたびたび反逆して侵攻してくるため、(毋丘儉は)諸軍の歩兵・騎兵一万人を指揮して玄菟(げんと)を進発し、諸街道を通してこれを討伐した」

「(位宮が)二万の歩兵・騎兵を引き連れ、沸流水(鴨緑江)のほとりに進出してきたので、梁口(かつこう)で大会戦となり、位宮は敗北し逃走した」

と書かれている。

『魏志』高句麗伝にも、

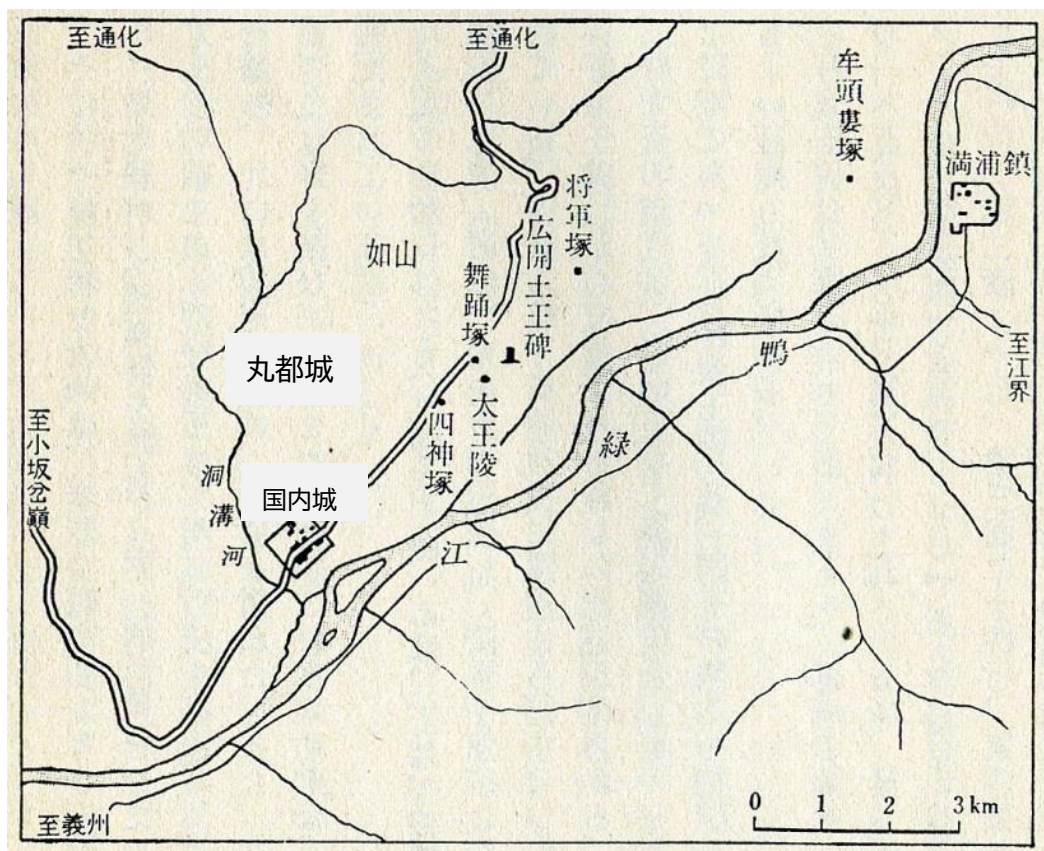
「正始三年(242)、宮は西安平(遼寧省丹東市付近)を寇し、その五年(244)、幽州刺史の毋丘儉の破るところとなる」

とある。

ただし、朝鮮側の『三国史記』では、毋丘儉が高句麗の都・丸都城を制圧したのは、位宮(東川王)即位二十年【正始七年(246)】八月のこととされ、次のように書かれている。

「二十年(246)年八月、魏は幽州刺史の毋丘儉を派遣し、一万の大軍を率いて玄菟郡から出発し、侵入してきた。(東川)王は歩兵と騎兵二万人を率いて、沸流河のほとりで迎え撃ち、斬首三千余級を得た。また、梁貊(りょうはく)の谷で、ふたたび戦って撃破し、殺したり、捕虜にした者が三千余

人にもものぼった。・・(ところが)強力な騎兵五千を率いて進撃したところ、冉丘儉は方陣を作り、必死に戦った。そのためわが軍は大敗し、死者一万八千人余にもものぼった。王は一千余騎を率いて鴨緑原に逃げた」



※吉林省集安市

鴨緑江の中流域にあり、もと「輯安」と記され、3世紀から4世紀にかけて高句麗の首都であった。もともとの首都は桓仁(遼寧省桓仁県)であったが、3世紀の初めに集安に遷都し、427年に平壤に遷都するまで約200年にわたって高句麗の政治の中心であった。

※国内城

高句麗の代々の王は、集安の国内城を拠点にした。国内城は高さ3~4メートルの堅固な石積みの城壁に囲まれ、四隅に石造りの櫓が築かれた周囲2.7キロ余りの長方形の城であった。

※丸都城

国内城の北西2.5キロの山岳地帯には別に山城が築かれた。周囲7キロに及ぶその山城は高さ6メートルの堅固な石造りの城壁に守られ、丸都城と呼ばれた。常時大量の武器や食糧が蓄えられ、戦時にはこの山城に立て籠もって敵を防いだ。

あまり知られていないが、1906年(明治39)、輯安(集安)北方の板石嶺の道路工事現場から「毋丘儉紀功碑」が発見されている。



「毋丘儉紀功碑」(京都大学人文科学研究所所蔵・石刻拓本)

	碑文	補正	備考
第一行	正始三年高句驪反	—	正始三年(242)高句麗離反
第二行	督七牙門討句驪五■	督七牙門討句驪五年	正始五年(244)高句麗攻撃
第三行	復遣寇六年五月施■	復遣寇六年五月施師	正始六年(245)再攻撃
第四行	討寇將軍魏烏丸单于寇	—	
第五行	威寇將軍都亭侯■	威寇將軍都亭侯公	
第六行	行裨將軍領玄■■■■■	行裨將軍領玄菟太守王頎	
第七行	■裨將軍■■■■■■■	行裨將軍領樂浪太守劉茂	
第八行	■■■■■■■■■■■■■	行裨將軍領帶方太守弓遵	

※国士舘大学横山貞裕「魏と邪馬台国との関係について」による

横山氏による第七行と第八行目の補正は、やや飛躍気味であるが、その勢いは好感が持てる。ちなみに、二行目の「牙門」の本来の意味は、「牙旗を守る将」である。竹竿の先に牙を剥いた猛獣の象牙を飾った「牙旗」を立てる。大将旗、牙纛（がとう）とも呼ばれる。

魏においては、左將軍などの総司令官の下に「牙門」という司令官が配置されることがあり、したがって「七牙門」とは、毋丘儉の下に七人の司令官が配置されたことをしめしている。

いずれにしても、中国の『魏志』と朝鮮の『三国史記』の異同について、いわば同時代の史料ともいべき「毋丘儉紀功碑」が、重要な判断基準を提供している。

	『魏志』	『三国史記』	「毋丘儉紀功碑」	判定
高句麗の離反	正始三年(242)高句麗が西安平(遼寧省丹東市付近)を侵す。	記載なし	正始三年(242)高句麗反	○
魏軍の出動 高句麗攻撃	正始五年(244)毋丘儉が沸流水の梁口で高句麗軍を撃破	記載なし	討句麗五年(244)	○
丸都城陥落			復遺寇六年(245)五月施師	○
		正始七年(246)八月		×

扶余へ糧食を求める

なお、『魏志』扶余伝によると、毋丘儉は高句麗攻撃に際し、玄菟郡太守の王頎を扶余に派遣し、糧食を求めさせている。扶余の大使の位居(いきよ)は、位の高い貴族をつかわして郊外まで出迎えさせ、郊外まで出迎えさせ、玄菟郡太守王頎の軍隊に糧食を提供したという。時期は記されていないが、毋丘儉が高句麗の丸都城を攻撃した正始五年(244)のことであつたらう。

扶余の概要は次のとおり。

扶余	
濊貊(わいはく)人	
扶余諸語: 夫余、高句麗、濊、沃沮の言語は同系統とみられている。	
基本的に中国の冊封国として朝貢	
献帝(在位 189~220)	夫余王の尉仇台(いきゅうだい)のとき遼東郡の公孫氏の支配下となる。公孫氏は高句麗と鮮卑に対抗するため夫余と同盟を組む。公孫氏の娘(あるいは妹)をもって尉仇台の妃とした。
黄初元年(220)	夫余が魏に朝貢した際、王は「夫余単于」と呼ばれた。
正始五年(244)	玄菟郡太守の王頎を扶余に派遣し、糧食を求めた。扶余の大使の位居は、位の高い貴族をつかわして郊外まで出迎えさせ、王頎の軍隊に糧食を提供した。

高句麗王・位宮の流浪

『魏志』毋丘儉によると、妻子をつれて丸都城を逃れた高句麗王の位宮は、沃沮(よくそ)の買溝(ばいこう)すなわち、北沃沮へと逃れたが、毋丘儉は正始六年(245)玄菟郡太守の王頎に命じて追撃させた。

朝鮮の『三国史記』によると、位宮が南沃沮(東沃沮)に逃げようとして楽浪郡の竹嶺(北朝鮮の咸南咸州郡か)を越えようとしたとき、東部密友(とうぶみつゆう)なる側近が、追撃する魏軍の將軍を偽計によって暗殺して自決し、その混乱に乗じて位宮が軍隊を三道に分けて攻撃したので、魏軍は楽浪から撤退したという。

このことからみると、位宮は妻子のみならず、ある程度の規模の兵に守られて逃亡していたことがわかる。

なお、位宮が向かった沃沮の概況は次のとおり。

沃沮(東沃沮)	
夫余族	
『漢書』地理志によれば「夫租」。旧楽浪郡の地で出土した銀印も「夫租」としている。ところが、『三国志』『後漢書』以降は「沃沮」と表記される。なお、沃沮の言語は夫余語とみられている。	
前 195～前 108 年	衛氏朝鮮に属する。
元封 3 年 (前 108 年)	漢の武帝により四郡(楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡)が置かれた際に、沃沮城(夫租城)を玄菟郡の県にした。
	のち玄菟郡の縮小に伴って楽浪郡に帰属した。
正始六年(245)	高句麗王の位居は北沃沮に逃れ、それを玄菟郡太守の王頎が追撃。 東沃沮＝南沃沮・北を挹婁、西を夫余、南を高句麗と境界を接していた。 北沃沮＝置溝婁・南と同じ習俗。なお「買溝婁」が通説。

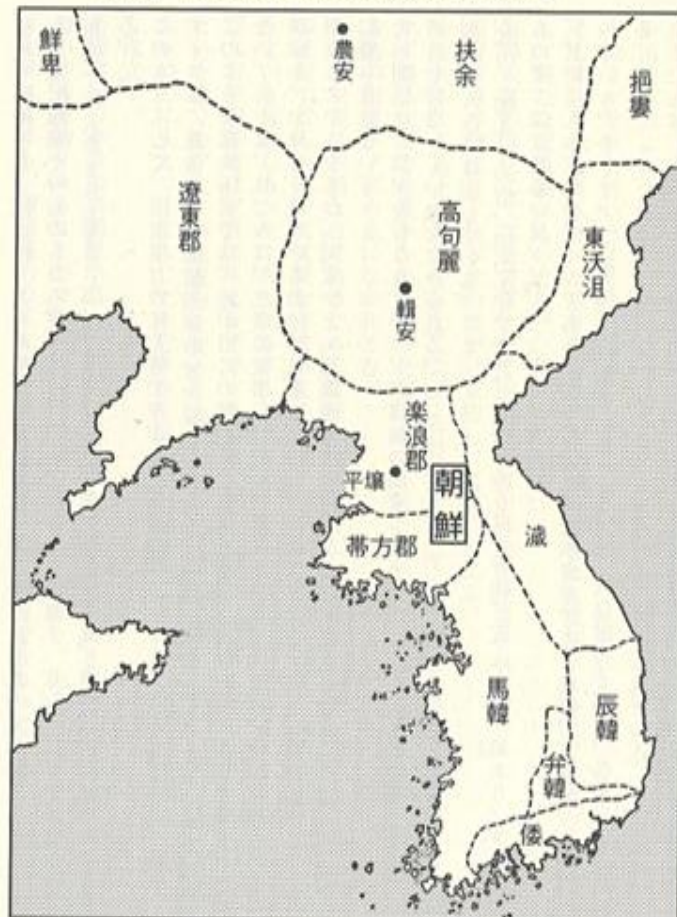
挹婁【ゆうろう・肅慎(しゅくしん)】

玄菟郡太守の王頎は沃沮(よくそ)から千余里の挹婁(肅慎)まで遠征し、その南界(ロシアのウラジオストクあたりか)まで到達し、石に功績を刻みつけたという。

挹婁	
種族・言語は女真族(ツングース系)か。ただし、古シベリア(古アジア)系とする説あり。	
古の肅慎(しゅくしん)の末裔とされ、魏の時代も肅慎と呼ばれた。 漢代以降は夫余に従属していたが、夫余が重税を課したため、魏の黄初年間(220～226)に反乱を起こし、独立して魏への朝貢を行った。	
青龍 4 年(236)	5 月、肅慎(挹婁)は楛矢(こし)を魏の明帝に献上した。



地図3 「東夷伝」による諸民族の地理的位置



(井上秀雄著、日本放送出版協会刊「古代朝鮮」による)

結局、玄菟郡太守の王頎は、＜東沃沮→北沃沮→挹婁(肅慎)＞まで遠征したが、高句麗王位宮を捕らえることができなかった。このため帰還の途につき、(濊の)不耐城に銘文を記して帰還の途についたという。

濊(わい)

南沃沮の南に境界を接している濊がある。もと楽浪郡の統治下にあったが、このころは高句麗に服属していた。

『魏志』濊伝によると、「正始六年(245)、楽浪太守の劉茂と帯方太守の弓遵は、嶺東(黒竜江省・単単大山嶺以東)の濊人が、勝手に高句麗に服属してしまったので、軍を起こして討ち、不耐侯らは配下の邑落を挙げて降伏した」という。

濊は扶余族のルーツともいえる種族である。概略は以下のとおり。

濊		
夫余族		
もと中国東北部にいた「濊貊(わいはく)」は、夫余および高句麗・沃沮のルーツとされ、『魏志』は、夫余の出自は濊で、貊は高句麗の別名または別種と記している。 また、濊の言語は夫余と同じと記されている。		
	臨屯濊	沃沮濊
前 195～前 108 年	衛氏朝鮮に属する。	
前漢の元朔元年 (前 128 年)	葦君の南閭らが、衛氏朝鮮に反逆し、28 万人を率いて遼東郡に服属。武帝は蒼海郡とした。	
元封 3 年(前 108 年)	武帝が四つの郡を設置し、臨屯郡とする。 (真番郡・臨屯郡・楽浪郡・玄菟郡)	
始元 5 年(前 82 年)	臨屯郡と真番郡を廃止し、楽浪郡・玄菟郡に併せた。	
元鳳 6 年(前 75 年)	楽浪郡管轄となる。楽浪東部都尉が不耐城を治所として治める。 嶺東七県(東曠県・不耐県・蚕台県・華麗県・耶頭味県・前莫県・夫租県)	
建武 6 年(30 年)	それぞれの県の渠帥(首長)が県侯となり、不耐・華麗・沃沮(夫租)の県はみな侯国となった。	
	濊と沃沮の間で長期にわたる争いが続き、不耐以外の侯国は滅びたが、不耐の濊侯だけは官員・官吏すべて濊族が担った。	
正始六年(245)	楽浪太守の劉茂と帯方太守の弓遵は領内の東濊が高句麗に従属したため軍を起こして討ち、不耐侯らは支配下の邑落とともに降伏した	

辰韓

濊の南に辰韓がある。『魏志』韓伝によると、魏の部從事(監督官)の呉林は、韓諸国はもと楽浪郡の統治下にあったという理由で八か国を分割し、楽浪郡に編入しようとした。

その際、役人の通訳に食い違いがあったため、韓の臣智(王)と人民は憤激し、帯方郡の崎離營(きりえい)を攻撃するに至った。たぶん正始七年(246)のことであつたらう。楽浪郡太守の劉茂と帯方郡太守の弓遵は軍を率いて鎮圧に出て、このとき帯方郡太守の弓遵は戦死したものの、辰韓などの韓諸国を制圧した。

ところで、高句麗王・位宮のその後の消息である。

彼は、しぶとく逃げ切った。

しかも、『三国史記』によると、「即位二十一年(247)に高句麗のかつての拠点・丸都城の復旧が困難とみて、平壤に新しい城を築いて拠点とした。そして、国民と宗廟・社稷を移した」という。

しかしながら、平壤といえば、神話伝説とも史実とも判然としない「檀君(だんくん)朝鮮」(前 2333 年? ~ 前 1000 年ごろ)や「箕子(きし)朝鮮」(前 1000 年ごろ ~ 前 194 年)、「衛氏(えいし)朝鮮」(前 195 年 ~ 前 108 年)など、いわゆる「古朝鮮」の都が置かれたとされる重要な土地である。

その後は前漢の武帝によって楽浪郡も置かれ、魏の時代においても、まさしく本稿でも縷々述べたように、位宮探索の拠点の一つが楽浪郡であつたはずである。

そのような土地に、高句麗王の位宮がどのような経緯で拠点を置くことができたのであろうか。

高句麗王の位宮は、魏の執拗な追跡から各地を逃げ回り、ついに逃亡先で 248 年に生涯を終えたというのが真相というべきではなかろうか。

黄幢(こうどう)

卑弥呼の第 2 回目の使者が、正始五年(244)7 月ごろ九州に帰着したことについてはすでに述べたとおりである。

その翌年の正始六年(245)、『魏志倭人伝』によると、

「倭の難升米に黄幢(こうどう)を賜い、(帯方)郡に付して假授せしむ」

という魏の皇帝の詔が発せられたのである。

黄幢とは、文字どおり黄色い旗のことである。いわば魏の「錦の御旗」を授けられている。

『魏志倭人伝』には、邪馬台国の南に位置する狗奴国とは、「もとより和せず」すなわち「以前から仲が悪かった」と書かれている。

二回目の使者たちは、都・洛陽において、そのようなことを訴えていたのであろうか。

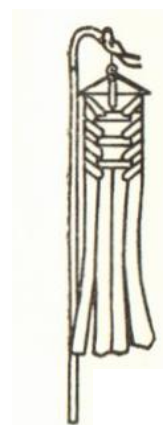
そして、正始八年(247)帯方郡の太守として王頎が着任した。

すでに述べたように、王頎は玄菟郡太守として高句麗王の位宮を追撃していた人物である。

前帯方郡太守弓遵の戦死を受けた人事であつた。

なお、これまで述べたことをもとに、帯方郡・楽浪郡・玄菟郡の太守の任命の状況を整理したのが次表である。

参考のために掲示しておきたい。



	帯方郡太守	楽浪郡太守	玄菟郡太守	高句麗王・位宮
景初二年(238)	10～11月ごろ劉昕着任	鮮于嗣が着任		
景初三年(239)	1～6月ごろ劉夏に交替	劉茂に交替	王頎	西安平に侵攻
正始元年(240)	2～4月ごろ弓遵に交替	劉茂	王頎	
正始五年(244)	弓遵	劉茂	王頎は扶余に糧食を求め。	丸都城攻撃
正始六年(245)	弓遵は濊を攻撃	濊を攻撃	北沃沮に逃れた位居を追撃	丸都城陥落 逃亡
正始七年(246)	韓を制圧。弓遵戦死	韓を制圧	王頎	逃亡
正始八年(247)	王頎着任	劉茂		逃亡
正始九年(248)	王頎	劉茂		死去

帯方郡の太守として王頎が着任した正始八年(247)、倭の女王の卑弥呼から使者が派遣された。『魏志倭人伝』には、

「(倭の女王卑弥呼は)倭の戴斯・烏越らを遣わして、(帯方)郡に詣(いた)り、相攻撃する状(さま)を説く。(帯方)郡の塞(さい)の曹掾史(そうえんし)の張政らを遣わし、よりて詔書と黄幢をもたらし、難升米に拜(ひ)せしめ、檄(げき)を為(つ)くりて之に告諭(こくゆ)せしむ」

とある。

倭国の載斯【さ(tsæg)・し(sieg)】と烏越【あ(ag)・お(hiu ā t)】という二人の使者は、帯方郡に対して、邪馬台国と狗奴国がすでに戦闘状態に突入し、切迫した情勢となっていることを報告した。

それを受けて、帯方郡は塞の守備隊長の張政らを邪馬台国に派遣し、正始六年(245)に下された皇帝の詔書と黄幢を直接難升米に授与し、檄文を発して激励した。戦いの大義は邪馬台国側にあることを宣言したのであろう。

そして、軍旗を授けられた難升米は、邪馬台国軍のいわば総司令官としての地位を魏に公認されたことになる。

張政が引き連れてきた兵の数は記されていないが、それなりの人数で訪れていたはずである。

彼らは邪馬台国軍とともに、狗奴国との戦いに加わった可能性が高いが、『魏志倭人伝』には何も記されていない。

なお、この狗奴国との戦いについては、ずっと先のほうで詳しく述べることとしている。

いずれにしても、このような情勢のなかで、卑弥呼は死去している。

『魏志倭人伝』は「以て死す」と書くのみで、その死に至った経緯を記していない。

卑弥呼がすでに死去していたために、難升米が代わって詔書と黄幢を受領したとする説はなりたない。二年前の正始六年(245)時点で、魏の皇帝の詔は難升米を名指していたからである。何ゆえ黄幢が難升米に下されたかは別の問題である。

なお、卑弥呼の死については、これまた別途述べることとしたい。

いずれにしても、高句麗王位宮の魏からの離反およびそれに対する魏の対応と、そのことに伴う中国東北部および朝鮮半島を含む周辺諸国への波及などについて述べ、あわせて、邪馬台国の卑弥呼の動きになどについても述べた。

以上、本号で述べたことをまとめれば、次のとおりとなる。

	記 事	邪馬台国の動向
正始二年 (241)	・芍陂(しゃくひ)の役・魏の司馬懿が呉軍を撃破	
正始三年 (242)	・高句麗が西安平(遼寧省丹東市付近)を侵す(魏志)。 ・高句驪反(毋丘儉紀功碑)	
正始四年 (243)		<ul style="list-style-type: none"> ・2~4 月ごろ帯方郡と事前調整 ・5 月ごろ二回目の使節団が九州を出発 ・6 月ごろ帯方郡を出発 ・12 月洛陽に到着
正始五年 (244)	<ul style="list-style-type: none"> ・毋丘儉が沸流水(鴨緑江)の梁口(かっこう)で高句麗軍を撃破(魏志)。 ・丸都城攻撃——討句驪五(年) (毋丘儉紀功碑) 	<ul style="list-style-type: none"> ・6 月ごろ使節が帯方郡に帰着 ・7 月ごろ九州に到着
正始六年 (245)	<ul style="list-style-type: none"> ・丸都城陥落・六年五月施(師) (毋丘儉紀功碑) ・北沃沮に逃れた高句麗王位居を玄菟郡太守王頡追撃 ・帯方郡太守守弓遵と楽浪郡太守劉茂が濊を攻撃 	<ul style="list-style-type: none"> ・難升米に黄幢(こうどう)を授与する旨の詔
正始七年 (246)	<ul style="list-style-type: none"> ・韓の反乱。楽浪郡劉茂と帯方郡弓遵が韓を討伐。 ・帯方郡太守弓遵は戦死 	
正始八年 (247)	<ul style="list-style-type: none"> ・帯方郡の太守として王頡が着任 	<ul style="list-style-type: none"> ・倭国の載斯(さし)と烏越(あお)が、帯方郡に邪馬台国と狗奴国がすでに戦闘状態に突入していることを報告 ・邪馬台国と狗奴国を仲介するため帯方郡の塞曹掾史張政が倭国に渡り、難升米に黄幢と詔書を手渡す。 ・卑弥呼、以て死す。

河村哲夫(かわむら・てつお)

1947年(昭和22)年福岡県柳川市生まれ。
九州大学法学部卒
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師
朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師



〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

(テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演